

新高等弁務官、就任



UNHCR/S.Hopper

「難民の国際的保護における基本的価値観を支持する」と宣言し、アントニオ・グテーレス氏（56歳）元ポルトガル首相が6月15日、第10代国連難民高等弁務官に就任した。同氏は、5月24日、国連のコフィー・アナン事務総長より指名を受け、同月27日、国連総会によって正式に選出。任期は5年間。

高等弁務官は、「非寛容さと過激思想が拡大している情勢下での庇護の維持と難民保護は非常に困難である。難民はテロリストでなく、むしろテロの最初の犠牲者である。難民を受け入れる寛容さを取り戻すよう国際社会に訴えたい」と7月末に記者会見で語った。

グテーレス高等弁務官は、これまでに20年以上、政治や公共部門に携わり、1996年から2002年までポルトガル首相、2000年には欧州理事会議長に、そして第1回EU（欧州連合）・アフリカ首脳会議の共同議長となり、いわゆるリスボン・アジェンダを採択に導いた。また1991年にはポルトガル難民評議会を創設。91年から2002年まではポルトガル諮問委員会の一員であった。81年から83年までは欧州評議会議員総会の一員であり、「人口統計、移住、難民」委員会議長を務めた。新高等弁務官は1949年4月30日、リスボン生まれ。2人の子どもの父。

UNHCR駐日事務所に新代表と新副代表が着任

6月から7月にかけて、ロバート・ロビンソン新代表と岸守一新副代表が着任し、今後の抱負について語った



**ロビンソン
新代表**

現在、国連の今後の方向性について様々な議論が行われています。主な議論の一つは、国連機関と加盟国のパートナーシップ強化だと思えます。

UNHCRは、これまで日本政府および国民の皆様を主要なパートナーとして認識し、今後もその協力関係に新たな道を開き続けようと考えています。

日本は、UNHCRにおいて米国に次ぐ第二の拠出国であり、世界の人道活動に対し多大な財政貢献をしてきました。

さらに最近では日本のNGOやJICAなどを通じて現場における関与を強めてきており、喜ばしく思っています。日本の人道活動は、海外において戦争やその他の理由で避難を強いられ、国際保護を必要とする人々を支援すると同時に、日本国内で庇護を求める人々にも手を差し伸べるものだと考えます。UNHCRは、こうした

日本の人道的課題の全てにおいて価値あるパートナーになれると私は確信しています。

また日本にはUNHCRの「顔」とも言うべき、国際的に著名な緒方貞子氏がJICAの理事長を務めておられます。緒方元高等弁務官の残された足跡を辿り、今後とも薫陶を受けつつ、日本とUNHCRが連携して人道活動を促進できるよう、努力したいと思えます。

ロバート・ロビンソン 駐日代表

大学で教育開発学の教鞭をとった後、1981年、スウェーデン事務所の教育担当としてUNHCRに入る。その後、UNHCRスイス・ジュネーブ本部、タイ、香港、アルメニア事務所で勤務。97年から2002年までは、UNHCRクロアチア派遣代表兼国連クロアチア人道調整官。日本赴任まで本部にてヨーロッパ局次長を務めていた。新代表は、58歳。ハワイのキアウ出身でアメリカ国籍。



**岸守一
副代表**

UNHCR駐日事務所は、多くの難民が暮らしている現場から遠く離れています。だからこそ「難民の目線」を常に念頭にお

いて活動したいと考えています。難民を保護や支援の対象として捉えるだけでなく、人間の安全保障の観点から、難民がその能力を発揮できるような具体的な関与を積み重ねたいと思えます。

その際、現場で奮闘しているUNHCRやNGOの仲間たちとその痛みや喜びを共有できるよう、全力を尽くします。

岸守一（きしもりはじめ） 駐日副代表

1987年、東大卒。外務省出身。99年3月より在ジュネーブ国際機関日本政府代表部に勤務。2001年10月より1年間UNHCR執行委員会のラボトゥール（本会議への報告者）を務める。40歳



スーダン・チャドなど海外での活動について意見を交換するために集った「UNHCRの友人」、パートナーNGOとの懇談会。写真はAMDA、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、難民を助ける会、難民事業本部、日本国際ボランティアセンター、日本紛争予防センター、ピース ウィンズ・ジャパン、緑のサヘル、ワールド・ビジョン・ジャパンからの出席者たち。この他、アドラ・ジャパンも参加。